

氏 名	あさ の あき こ 浅 野 明 子
学 位 の 種 類	博士（歯学）
学 位 授 与 番 号	岩医大歯博第112号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月6日
学 位 論 文 題 目	若年者における顎関節症発症と心理特性に関する2.5年間の前向きコホート調査

## 論文内容の要旨

### I 研究目的

顎関節症発症の寄与因子としては、局所的因子や身体的因子の他に、精神的因子の関与が示唆されている。顎関節症患者の心身医学的特性については、従来から各種心理テストによる調査が行われ、精神的因子と密接に関連している可能性があり、治療効果にも影響を及ぼすことが知られている。しかし、その多くは症状発症後の心理状態を調査した横断研究である。

本研究では、顎関節症発症の好発年齢である20歳前後の年齢層を対象コホートに設定した前向き調査を1996年から開始し、心理特性ならびにストレス要因が顎関節症の発症にどのように関係するかを分析した。

### II 研究方法

調査対象は、1996～2000年度に岩手医科大学歯学部に入学者、顎関節症状の現症、既往歴がない207名（男性139名、女性68名、平均年齢 $20.4 \pm 2.2$ 歳）を対象コホートとした。調査方法は、初年度に顎機能に関する調査、Life Events・Life Changes 質問票調査、心理テスト4種類（Y-G, CMI, SDS, MAS）を行い、2.5年後に再度顎機能に関する調査を行った。回収したデータはコンピュータ上で処理し、心理テストについては顎関節症発症のリスクを表すオッズ比を求めた。統計学的有意性は95%信頼区間（95%CI）から判定した。また交絡因子（性別、年齢、関節雑音）の調整には、ロジスティック回帰分析を用いた。Life Events・Life Changes 質問票の2群間の比較にはMann-Whitney U-test、多群間の比較にはKruskal-Wallis testと多重比較法であるBonferroniの補正を行った。有意水準は5%とした。統計処理には統計解析ソフト：SPSSver.14.0J（SPSS株式会社、東京）を用いた。

### III 研究成績

初年度の質問票による顎関節症の調査の結果、適格基準に合う207名に対して2.5年間の追跡調査を行った。2.5年後の調査に応じたのは171名で、脱落者は36名、追跡率は82.6%であった。

本研究における顎関節症の定義は、顎関節痛、咀嚼時痛、開口障害のいずれか1つ以上ある場合とし、関節雑音単独の場合は、顎関節症から除外した。今回171名中、顎関節症が発症したのは25名であった。症状としては、疼痛のみが20名、開口障害のみが1名、疼痛と開口障害を伴っているのが4名であった。

初年度の心理特性が2.5年後に顎関節症に与える影響をみるため、ロジスティック回帰分析による調整オッズ比を求めた。その結果、粗オッズ比ではMASの高度不安群で4.38、Y-Gの不安定積極型のB類で11.79、不安定消極型のE類で14.54と有意な値を示した。調整オッズ比の結果では、MASの高度不安群で8.93、Y-GのB類で17.78、E類で15.00と有意な値を示した。

Life Events・Life Changes 質問票に関しては、調査対象の母集団のうち125名から回答を得た。各質問項目における健常者と顎関節症発症群のスコアの平均値を比較したところ、Mann-Whitney U-testでは有意差は認められなかったが、健康を除く5項目とスコアの合計で発症群の方が高い傾向を示した。

心理テストとLife Events・Life Changes 質問票については、各心理テストとライフスコア合計の関係をKruskal-Wallis testと多重比較法であるBonferroniの補正により分析した。その結果、ライフスコアの合計値はY-GのBとC、D類の間に、またMASのIとII～V群との間に有意値を認めた。

#### Ⅳ 考察及び結論

精神的ストレスを経験した場合、非機能運動が生じ、さらに筋の緊張亢進や顎関節部の痛みが生じると考えられる。さらに生活上の問題がストレスとして心身面に影響し、情緒不安定な性格はより不安を高め、顎関節症の発症に間接的に反映されたと考えられた。

2.5年間にわたる心理テスト、Life Events・Life Changes 質問票の調査結果から、高度な不安や、情緒不安定な心理特性が顎関節症の発症の寄与因子となることが示唆された。日常生活上のストレスが心理状態に影響することが示された。

#### 論文審査の結果の要旨

論文審査担当者

主査 教授 石 橋 寛 二 (歯科補綴学第二講座)

副査 教授 三 浦 廣 行 (歯科矯正学講座)

副査 教授 米 満 正 美 (予防歯科学講座)

#### 試験・試問結果の要旨

日常生活上のストレスは、顎関節症発症の寄与因子として心理特性にも影響を及ぼすと言われている。しかしその発症機序については、明らかにされていない。これまでの前向きコホート研究によって示された寄与因子は臨床所見から判断されたものが多く、日常生活上のストレスと心理特性との関連から検討した報告はみられない。

本研究では、顎関節症発症の予測因子を4種類の心理テストとストレスの指標となる Life Events・Life Changes 質問票を用いて検討している。今回の結果から、高度な不安や情緒不安定な心理特性を示す場合に顎関節症発症のリスクが高くなり、さらに日常生活上のストレスが心理状態に影響するという貴重なデータが得られた。

症状のない時期における顎関節症発症のリスク判定にこれらの心理テストや Life Events・Life Changes 質問票を用いる意義は大きい。本研究は、顎機能障害発症の好発年齢層である20歳代を対象に前向き調査を行うことにより、高度な不安や情緒不安定な心理特性、ならびにストレスが顎関節症発症の寄与因子であることを明らかにした。今まで明らかとなっていなかった顎関節症発症の病因解明の一助となることが期待される研究である。

本研究で得られた結果は学位論文に値すると評価した。

#### 試験・試問の結果の要旨

本論文の臨床における意義、心理テスト、Life Events・Life Changes 質問票、顎関節症の寄与因子ならびに顎関節症の発症に関する基礎的な事項を試問した結果、適切な解答が得られた。外国語に関しても十分な能力を有することが認められた。